

天使と呼ばれた喰種

青い人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『私』が目覚めた時、そこには真つ赤な花が咲いていた。

これは東京喰種の世界に喰種として転生した主人公が、必死に藻掻き、生き、そして死ぬ物語。

目次

プロローグ

1

弱肉強食

6

プロローグ

降り注ぐ轟雷の中で私は、たった一つの確信をした。

ああ、きつと私は……今この瞬間、今この為に生まれてきたのだと。

ずっとずっと、汚泥の様な訝しの中で藻掻いた先。そこに差し込むのは、確かな光だった。

——私は天使ちゃん。もう一度アナタがそう呼んでくれたなら、それ以上に幸福なことはきつと無いだろう。

◇

私が私を取り戻した時、いつそ悪夢かと思った。

きつと、余りにも耐え難い飢えからの解放が衝撃的すぎて、頭がどうかしてしまつたのだろう。

だが脳内を駆ける酷く半端で異質な記憶は、それが間違いなくウソではないことを主張していた。また、それを確信している自分もいる。

私は紫芽りあ。

齡十にも満たぬ『喰種の幼体』。

そしてそんな存在を生まれる前から知っていた……転生者だ。

「ウソ……でしょ……」

口内に広がる甘美な味わいと、地獄の様な赤に塗れたヒトの死体。

どうやら私は、この味が齎す途轍もない幸福感で前世を思い出したのだろう。

なんてことだ。これならいつそ、何も思い出さず、ただ無力な一喰種としてひっそりと生きて死んでいた方がマシだった。

そう、私は元はただの人間として生きて……どのようにかは分からないが死んだ身だ。前世を思い出したと言っても、かなり記憶がボロボロなため成人はしていたはずだということしか分からないが、少なくともこの小さな身体には不釣り合いな精神であることは間違いない。が、確かに私は人間だったと胸を張って言える。

しかしそんな私が、今や死肉を貪る怪物だ。

ヒトしか食えず、いずれハトと呼ばれる捜査官に追われて殺される……そんな無様な怪物なのだ。

もし私が何も知らない身体通りの幼子であれば、多少の孤独や憎しみを抱えても、そう言うものだとなんて出来た。それしか知らないのだから、他の幸福を知らないのだから

ら、ただの喰種として生きて死ねたのだ。

だが今となつては少し事情が違う。

「……とりあえず、何処かに隠れよう……」

自我の再構築の衝撃で、思わず散々思考をこねくり回してしまつていたのを一度止め、移動することにする。

何故ならこの身体、りあ幼女は腹が減りすぎてよほど余裕が無かつたらしい。真夜中とは言え路地でも何でもない小さな公園で狩りを行つてしまつたのだ。

公園に設置された時計を見る限り、まだ日が昇るには時間が掛かりそうだが死体の横でのんびりしている訳にはいかない。

「血塗れだし……多分、赫眼も出てるだろうし……」

私はそう独り言を呟いて、ちらりと幼女の餌となつてしまつた哀れな男性死体を見る。彼は恐らく、こんなところで死んでいい人間ではなかつたのだろう。

当時の意識は朦朧としていて、私はあまり覚えていないが彼は真夜中の往来で彷徨つていたりあ幼女を心配して声を掛けてくれたのだ。

スーツを着込んだ彼は、いかにも激務の残業から帰つてきましたと言つた雰囲気だったのにも関わらず、無関心ではいられなかつたのだろう。

その結果として、飢えた獣に喰われてしまつた。

私はそつと彼に手を合わせた。

この時初めて……前世でもあまり意識していなかった『ごちそうさまでした』を強く祈った。

アナタのおかげで、私は生きられる。アナタのおかげで私は目覚めた。

人間としての私が罪悪感と人食いに対する嫌悪感を訴えるが、それらは今は無視する。

きつと、私がするべきことは感謝だから。それが傲慢で、自分勝手でも、喰種となつてしまったのだから。私はもう、そう言う生物なのだから。

前世の記憶があつても、私は結局十年間は喰種として生きた『紫芽りあ』なのだ。あくまでそちらが、私の魂の本命なのだから。

「とにかく……逃げなきゃ……」

両親はいない。つい最近ハトに殺された。だからこそ自我を失うほど飢えた。

腹は膨れた。小さな身体に彼の身体は十分すぎた。

逃げるべき場所は……分からない。ここが東京の何処かであることは分かるが、何区なのかも分からない。

でも移動はしなければならぬ。隠れなければならない。

そうして私は何かに追われるように走り出した。

先の見えない焦燥感が、私の足を突き動かしたのだ。

安寧を、安心を、そして……生きる意味を。

なぜ私が『東京喰種』の……ましてや喰種側に生まれたのかは分からない。だがそこには、何か意味があるはずなのだ。使命があるはずなのだ。

でなければ私、私は……。

陽の光など一切感じられない、薄ら寒く寂しい暗闇の中。

私は一心不乱に駆けるのだった。

弱肉強食

服に付いた血も、口元を汚す血も気に留めず、私は闇夜を走った。

そうして辿り着いたのは、何とか身を隠せそうな都会の路地裏。最後に確認した時刻が夜中二時頃だったので、今はもう三時かそこらだろう。この小さく幼い身体には些か眠気の辛い時間帯だが、無防備に寝る訳にもいかない。

なので私は、身体を休められるスペースは無いかと路地裏を彷徨い歩くことにした。どうやらこの辺りはあまり治安が良いとは言えないらしく、いつ棄てられたのかも分からないモノがそこらしこに放置されている。

時たま小動物の死骸も転がっている辺り、本当に人の出入りが乏しい場所なのだろう。ある意味、今の私にはおあつらえ向きな場所だった。

何せ、今の私には本当に余裕が無いのだから。

腹は膨れたが、これからの展望がまるで無い。故に一度身体と頭を休めて、記憶の整理と未来についての思考を行わなければならないのだ。

今この状況で、他のタスクが増えるとなると、本当にどうにかなってしまいうだろう。それくらい、心の焦燥感が消えてなくならない。

「ふう……とりあえずこの辺りでいつか……」

散々歩き回って、ようやく隠れて休められそうな場所を発見した。

そこは迷路の様な路地裏の行き止まりの一角であり、周囲の建物の妙な立地の所為か、L字に取り残された空きスペースだった。

ここならば、わざわざ注意深く覗き込まなければ見つかるまい。

そして運良くそこには、段ボールや廃材が放棄されているのもポイントが高いと言える。

「ふああ……頑張れ私……雑でもいいから寝床を作らないと……」

今にも倒れ込んで眠ってしまいそうな身体に鞭を打ち、眠気眼を擦りながら身の丈に合わない廃材を引き摺る。

寝床と言うのは、良くも悪くも重要だ。その質によって体力の回復量に大きな差があるのだから。

「よ、い、しよ、よ、い、しよ、よ」

硬く冷たい地面に体温を取られない様に、潰れた段ボールを五枚ほど重ねる。サイズは小さいが、相応に私の身体も小さいので問題は無い。

そしてその上に、掛け布団代わりにブルーシートを重ねれば、廃材ベッドの完成だ。何となく、ヒトだった頃の記憶のせいかな、今の状況を惨めたらしく思ってしまう自分

がいるが……喰種とはそう言う生物なのだ。

人を喰らう、ある意味上位種とも言えるが、その実は人間の目からコソコソと隠れ、潜み、常に命の危険の中で生きている。

何て………止めよう。きつと、こんなに気分が沈むのは眠いからだ。今日の所はさつさと——ッ

瞬間、薄ら寒い情動が私のうなじを駆け上がる。

その明らかな異常に、幼いながらにヒトとは違う卓越した私の身体能力が弾かれる様に背後を確認した。

そこには、血走った赤と黒の双眸。喰種の、赫眼だ。

「なんだあ〜？ 人間の血の臭いと思えば、喰種のガキじゃねえかあ」

そいつは、明らかに飢えた眼を私に向けている。恐らく、私の服や身体に付いた血液の臭いを辿ってここまで来たのだろう。

「おおいガキイ！ ここは俺の狩場だぞお〜？ ううん？ なあに勝手に腹膨れさせてんだあ！」

徐々に怒りのボルテージが上がり、涎を撒き散らしながらそいつは怒鳴り声を上げる。どうやら数週間ほどは人肉にありつけていないらしい。理性と本能のバランスがかなり危ういことになっていそうだ。

しかし、この状況。のんびりと男の状態を観察している場合ではない。

私はただでさえ……肉を食ったとは言えかなり体力が限界に近いのだ。そして奴と私は大人と子供で、戦闘経験にも差があるのは確実。

「ああもういい。この際喰種の肉でも……共食いでも構いやしねえ」

突然何かのスイッチが入ったように、奴は間延びした口調が引き締まり、少々虚ろな目で私を見据える。そして、腰のあたりから二対の太い触手……いや、鱗赫が。

そうだ、赫子だ。私は何故忘れていたのだろう。ソレを見た途端、喰種の戦闘にとって最も重要な器官のことを思い出した。

この場で大事なのはただの戦闘経験の差だけではない。赫子の有無、そして性能差と言うのは、時に身体能力すら凌駕する要素なのだ。今の私に忘れてて良いものではない。なかった。

「赫子……」

ポツリと呟く。

私の脳内に、私自身のソレはあるか。父や母から教わってはいないか。前世の記憶が圧迫し、未だに混乱、散乱している過去の記憶を必死に洗う。

だがそれを大人しく静観するほど、奴に余裕も、ましてや意味も無い。

「死ねえ!!」

爆発的な踏み込みで私に迫り、ザラザラとした赫子が荒々しく襲い掛かる。

そこで私は一旦思考を止め、必死に転がるようにそれを避けた。身体が小柄なのが幸いしていたらしく、何とか攻撃の隙間を潜り抜けることに成功する。所謂、的が小さいというやつだ。

しかし、だからどうだという話でもある。

こちらには決定打が無い。

いや、相手の首など、急所にも噛みついて出血を強ければ何とかなるかもしれないが、可能かと問われれば、難しいと言わざるを得ない。

だが諦めて大人しく喰われるというのも、また違う。

私は生きなくてはならない。生まれた意味を、使命を、それを見つけ、果たさなければならぬのだ。そうでなければならぬのだ！

「ああああああ!!」

死を前にした恐怖も、混乱も、何もかもを怒号で包み、私は走り出す。

背中が熱い、眼も熱い。何らかの力の様なモノが籠っている様な熱だ。

「づう!!」

何か背中を突き破る。その皮膚を裂く感覚に、熱さを覚えるが、不思議と痛みは無かった。

まるでそれが、本来備わっている機能かのように。何ら異常ではないと身体が告げているかのよう。

赤く、黒い霧が舞う。

それはきつと、私の意思の結露だった。